2022年1月　毎月1日発行　第161号
発行者　光栄プロテック　中川

1月に向けて

代表取締役　三田雅憲

いよいよ令和も4年を迎え、又新しい年を迎えようとしております。

新型コロナがこの2年間で私どもの生活や仕事のやり方にいろいろな爪痕を残し、様々な業界に影響を与えました。当然、巣ごもり需要に対応したところは大忙しであったようですが、多くは厳しい状態であったと思います。当社においても大変厳しい時期となり、リーマンショック以上の影響がありました。当然、大きな赤字も出ました。幸い銀行の公的融資がすぐに受けることが出来たのですが、いつまでもこういう状態ではいけません。

又、10月より仕入材料の高騰が発生しました。当社も10月より新規の見積りに関しては、10～20%アップの価格表示をさせて頂いています。大阪・千葉の営業部諸君も価格折衝は苦慮していると思いますが、頑張ってくれていますし、それをはね返す為にも工場の諸君の納期対応力と品質力が必要となってきます。つまり、全社一丸となって危機意識を共有し、立ち向かっていかねば乗り切っていけないと考えております。幸い前向きにとらまえてくれる社員も多く又、自分たちの会社を守るという意識が強い方が多いのは社長としても嬉しく思います。

今月は私を含め、当社の役職者や先輩も含めて「指導者のあり方」（人を育てる上で大切なこと）と題して、松下幸之助さんから学びたいと思います。

「人を育てる、部下を適切に指導育成していく、そういう事の為に大切なことの1つは、指導すべき立場の人が指導者としての責任を正しく自覚認識しているということである。これは、一面極めて当たり前のことである。しかし実際にはなかなか十分でない姿もあるまいか。

例えば、昨今の日本においては、若手や青少年に対して親や教師などの大人たちが正しく言うべきを言い、教えるべきを教え、指導すべきを指導しているか。もちろん中にはそういう姿もあろうが、若手を正しく育成することに対して、初めからサジを投げているような姿も少なくないように思われる。どうせ言っても聞いてくれない。だから言っても無駄だ。ということで指導すべき立場にあるにも関わらずその立場から降りている。

ー中略ー

そして先輩、大人たちは言っても駄目だ、というので教えない、注意もしない、叱りもしない。もちろん若手たちとしては叱られるのは嫌ではあるが、その内容が適切であれば、あとからその良さが分かってくる。自分の為に最終的にはなるのである。しかし先輩、大人は知らん顔をして「若手の自主性を尊重するのだ」と言い訳してほとんど指導も躾もしてくれない。これでは物足りないし、大人に対して失望するし、尊敬も生まれない。

なぜ、大人は若手を叱らないのか？それには大人としての物事に対する見識を十分に養っていないこともある。こうあるべし、こういうことが正しいということが大人自身わかっていない。それで若手に対して言うべきことが分からない、適切な指導もできない、こういう事である。

しかし、もっと大切なことはやはり自分自身が若手を指導すべき立場にふさわしい態度を取るように努めているかどうかということではないか。指導者（経営者・管理者）としての自覚、そしてその責任である。そういうものが無い場合には、指導者（経営者・管理者）は、指導者でなくなる。単なる傍観者である。こういう商店や会社があったとしたらそれは非常に不幸である。社長が社長としてみんなの指導者としての責任と自覚した行動をとらないというのでは、当然経営はうまくいかなくなってくる。やはり、社長は非常に強い責任感を持って「みんなこうやろう、こうしよう」と呼びかけを行わなければならない。社員はこの呼びかけを受けて何を考え、何をすれば良いか分かってくるはずである。みんなの知恵も力も発揮されてくる。そこから生き生きとした全員の活動が生まれ、好ましい成果ももたらされてくる。こうした点について、経営者・管理者の立場にある人は改めて自らを振り返ってみることが大切では無かろうか？」

と今から40年以上も前に述べられております。しかし、40年前と今もあまり状況は変わらない部分もあります。幸いに当社の先代は、その辺を愛情を持って厳しく口に出して指導をしてくれたおかげで私をはじめ10年以上の社歴を持った社員諸君はこの話を理解してくれると思います。

来年は恐らく仕事が忙しくなる年です。大阪と千葉が相互に協力しながらワンチームで対応していかねば、品質や納期を担保できない可能性が出てきます。また1月より営業時間も短くなりますので、時間内での1人1人の考えた動きが重要になってきます。1人1人技術力と自分の置かれている立場や求められている仕事をしっかりと自覚してやり遂げることが未来を開いていくと考えます。どうぞ来年も一緒に頑張って進んでいきましょう。